

県産材の需要と供給を一体的に創造しよう !!



題名：木材搬出作業 撮影場所：浜松市天竜区春野町 撮影者：青嶋隆男（浜松市）

2 ページ「首長は語る」関連写真



▲大観覧車「Fuji Sky View」



▲ふじ・紙のアートミュージアム

INDEX

本誌はホームページでも掲載しております。是非ご覧ください。URL：<http://www.moritohto.jp>

2

首長は語る (No.46)

新しい挑戦を繰り広げる富士市

3

支部だより①

東海道本線上部斜面で発生した災害及び復旧工事に関して (中部支部)

4

支部だより②

モザイク型小規模皆伐の取組みについて (中遠支部)

5

県庁だより①

ニホンジカによる森林被害への新たな取組
～森林整備者による捕獲～

6

県庁だより②

非住宅分野での県産材の利用拡大の取組 (林業振興課)

7

県庁だより③

「ふじのくに森林の都しずおか」でつながろう (森林計画課)

8

本部情報

林業への就職希望者の動き (森林の仕事ガイダンス)

8

森林・林業関係のイベント紹介

首はる 長語

No.46

富士市長 小長井 義正



はじめに

大きな富士山を仰ぐ、本年度市制施行50周年を迎えた富士市。「いただきへの、はじまり 富士市」という市民と協働でつくったブランドメッセージを新たに掲げ、次なる50年に向けてスタートを切りました。そんな新しい挑戦を繰り返してやうとしている富士市について、富士市長にお話を伺いました。

富士市の自慢

北には日本一の霊峰「富士山」、南には日本で最も深い駿河湾、市内には日本三大急流の一つ富士川が流れている富士市は、静岡県東部に位置する自然豊かなまちです。世界に誇る富士山の豊かな緑と湧水の恵み、交通の要衝という地理的条件を活かし、目覚ましい発展を遂げてきました。人口は県内で浜松市、静岡市に次いで多く、豊富な地下水を利用した製紙業に代表される工業が盛んで、特にトイレットペーパー生産量は日本一を誇っています。

富士市の森林

森林面積 12,058ha を保有し、市域の林野率が 49.2% という富士市は、明治以降に植林が始まりました。現在のスギ・ヒノキ林の大半は昭和20～30年代に植林されたもので、今日も富士山の南麓に緑の彩を重ねています。その山林は、木材利用はもちろんのこと、工業発展を支えた豊富な水源の涵養、土砂崩れや水害などの災害防止に多大な貢献をしています。

林業再生への取組

山を守ることは富士市を守ることであり、山を荒廃は地下水にも悪影響を与えるので、間伐など山に手を入れることが大変重要です。富士市

は間伐木を利用することを進めています。立地面からみると、富士市には丸太集積・共販施設である富士木材センターがあり、合板工場や、製紙会社が未利用間伐材などを燃料とする木質バイオマス発電施設などといった大口需要先もあります。大量かつ成熟した資源、丸太集積施設と大口需要先が近接しているという好条件が揃う地域であると言えます。

また、環境面においても、バイオマス発電施設はエネルギーコストを下げるとともに、CO₂の排出削減にも貢献されています。この導入に伴い、富士市は市有林の間伐作業による未利用間伐材の経済的な搬出の実証を平成26年度から実施しています。さらに、未利用間伐材の利用用途拡大のため、富士商工会議所がすすめている小規模木質バイオマスボイラー開発の検討会についても参加しています。

これらの動きを受け富士市では持続可能な林業経営に向け、森林経営計画等に基づく適切な伐採による木材生産を推進するとともに、森林認証 SGEN を平成25年度に取得しました。

さらに、富士市・富士宮市の行政や林業関係団体等で構成する「富士地区林業振興対策協議会」では、富士山麓のヒノキをブランド化した「FUJI HINOKI MADE」の販路拡大に努めています。

また、次世代の新素材として注目される CNF (セルロースナノファイバー) は、富士市の代表的な地場産業である紙・パルプ産業のみならず、富士市に立地する、多くの産業分野への展開が期待される新素材です。CNF 製造事業所の一大集積地を目指して、様々な補助金を創設しました。これを契機に、森林資源の CNF への活用や、CNF の具体的な製品化が加速することを大いに期待しています。

富士バンジー

須津川溪谷の上空に架かる須津溪谷橋が新たな富士市の観光スポットになっています。連なる山々の間から駿河湾まで望める須津溪谷橋にはバンジージャンプ台が設置されており、大綱の滝を正面に見下ろしながら、54 mを一気に飛び下りる絶景バンジーを体験することができます。



▲須戸溪谷橋の富士バンジー

ます。昨年の8月にオープンし、既に国内外から数多くの方々が挑戦しており、今後の集客も期待できそうです。

富士川サービスエリアの観覧車

2017年2月23日の富士山の日、東名高速道路上り線富士川SAに大観覧車「Fuji Sky View」がオープンしました。そびえ立つ富士山を眺めながら、12分間の特別な時間を味わうことができる観覧車は、道の駅富士川楽座と共に富士市の観光名所になるでしょう。日没になると、色鮮やかなイルミネーションの演出も始まり、富士市の新たなランドマークになっています。

ふじ・紙のアートミュージアム

富士市が誇る紙産業。紙を素材とした芸術「紙のアート」を新しい魅力として発信するため、ロゼシアター内に「ふじ・紙のアートミュージアム」がオープンしました。産業としての紙に加え、芸術・文化面からも「日本一の紙のまち・富士市」を全国にPRしていくことが目的です。開館記念展として開催した日比野克彦展では、日比野氏による市民参加のワークショップを実施するなど、多くの来場者で賑わいました。

おわりに

富士市長の趣味は仲間と作ったおやじバンド。エレキギターで「エリック・クラプトン」などのロックを弾き鳴らし、ライブにも出演するほどの腕前。そんな市長は、自らが営業部長となり、2020東京オリンピック・パラリンピック施設への富士ヒノキ利用に向けて、林野庁長官とも面会しトップセールスを行うなど熱意にあふれ、これから富士市の山を守るために林政をどう進めていくか、真剣に数々の課題と向き合っているらしいです。

急激に木材生産量が増えている富士市、今後の富士市が楽しみです。

支部だより①

東海道本線上部斜面で発生した災害及び復旧工事に関して

中部農林事務所 治山課 主査 山崎由晴

東海道本線などを不通にした斜面崩壊の復旧工事について報告いただきました。

はじめに

平成26年10月6日に県内を通過した台風18号により、県内では人的及び住家被害の合計が1,700件を超える深刻な被害が発生した。

東海道本線（由比 - 興津駅間）（以下鉄道）では、鉄道上部斜面が崩壊し、鉄道の不通及び国道1号が交通規制される災害が発生した。本報では、この災害要因と対策について報告する。

なお、治山工事は鉄道会社の擁壁完成後のH27.9.14に着手し完成はH28.6.27となった。

災害概要

台風第18号通過に伴い静岡市清水区では64.5mm/h、398.5mm/24h（観測史上最大（気象庁HP））の非常に強い雨量を観測した。

静岡市清水区興津東町地内では、鉄道上部斜面が斜面長約80m、幅約



図-1 斜面崩壊状況(出典:www.at-s.com)



図-2 東海道本線土砂流入状況

30mに渡り崩壊した（図-1,2）。

この結果、鉄道は10日間不通になり、旅客約3.5万人/日、約5.5万t/日の鉄道輸送に影響し、さらに国道1号線は4日間にわたり片側交通規制がされた。

対策工

施工に先立ち、山腹内2か所でボーリング調査を行った。その結果、今回の崩壊地から更に東斜面にかけて不安定な強風化砂岩層（推定層厚9m程度）が確認された。

斜面傾斜、地質及び鉄道が直下を通過する地理的な制約を考慮し、主たる斜面崩壊対策としてアンカー工（259.9kN/本）を採用した。

施工時の制約と対応

対策工実施に際して、重要な保全対象である鉄道及び国道が直下にあるため①交通影響の最小限化、②資材搬入及び施工の困難性という、2つの課題があった。

鉄道対応として、事前に管理者と施工や行政上の諸手続き、鉄道運行の安全確保等に関する課題条件を整理した覚書を締結し、相互協力体制を築いた。併せて、国道管理者とも

道路占用等にかかる行政手続きを整理し、事前調整を済ませた。

通常のアンカー工では、掘削機械設置等で足場が必要となるが上述のとおり、資材運搬に大きな制約があるため約3千万円のコスト縮減と約40日の工期短縮（表-1）を図れる無足場工法（図-3,NETIS ;CG-090003-VE）を採用した。

まとめ

このように、事前に関係機関と十分な調整を行い、かつ新技術も採用し、工程とコスト縮減を熟考したことにより、施工困難な箇所であったが標準工期（334日）と比較し、50日の工期縮減と3千万円のコスト縮減を実現した。竣工状況は図-4のとおり。

最後に本工事の計画から竣工に至るまで、国土交通省静岡国道事務所、静岡県警清水警察署、JR東海、県森林保全課（敬称略）等から多大なる御指導、御助言をいただいた。ここに、心より感謝申し上げる。



図-3 無足場アンカー工法

表-1 アンカー工経済比較

掘削方式	ローリーパーマシン (5.5kw/3.7t)	ローリーマシン (5.5kw/0.5t)	無足場工法 (5.5kw/0.3t)	
掘削	28.0日	119.7日	38.9日	
部材挿入	1.9日	8.5日	3.9日	
頭部処理等	7.6日	9.2日	31.6日	
機材設置撤去	3.8日	15.9日	2.0日	
足場設置撤去	62.5日	46.9日	0.0日	
相対所要日数	38.5日	278.5日	±0日	
（千円） 経済性	直接工事費	59,922	46,348	42,373
	本工事費	100,669	77,865	71,187
判定	×	○	◎	
総合判定	38.5日増 2,95千万円増	278.5日増 0,66千万円増	◎	



図-4 竣工状況

支部だより②

モザイク型小規模皆伐の取組みについて

掛川市森林組合 長嶋勝樹

近い将来必ず必要になる「モザイク型小規模皆伐施業」について紹介いただきました。

背景

森林資源が成熟してきたことで、森林施業は「保育の時代」から「活用の時代」へと移行する時期を迎えています。静岡県内でも木材増産や合板工場・製材所などへの安定供給が求められています。そのような中、当組合でもこれらのニーズに応えるべく、体制整備に取り組んできましたが、年々高まるニーズに迅速かつ柔軟に対応していくためには、間伐施業（利用間伐）のみならず、より生産性が高い皆伐施業も必要と考え、「モザイク型小規模皆伐」への取組みを始めました。

施業実施にあたって

平成27年度より取組みを始めたこの更新伐施業は、36haの長期育成循環林施業の計画策定からスタートしました。森林所有者の理解のもと、県と協議を行いながら、約20年間の長期計画を作成しました。20年間の中で更新伐と利用間伐を繰り返し行っていく計画です。

施業地は70～75年生のスギ・ヒノキの人工林で一団地36ha。尾根部分は林道や作業道が通っており大型車の進入も可能です。このエリアは比較的傾斜が緩く作業道が入れ易く、「長伐期大径木育成エリア」としてゾーニングをしました。一方、沢沿いなどの急斜面地は40度以上の傾斜が続くため、車両系機械による利用間伐施業は困難を極めます。このエリアは架線系機械を活用してモザイク型小規模皆伐を進める「更新伐推進エリア」としました。このエリアにおいて森林環境保全直接支援

事業の更新伐のメニューを活用することになりました。思い切って更新伐施業に舵をきったわけです。

県森連の指導の下

当組合ではここ20年近く皆伐地における架線集材作業をほとんど行っておらず、残念ながら架線集材技術がうまく継承されてきませんでした。そこで、今回ビジネス林業促進事業を活用し、県森連の指導を仰ぎ、架線技術の再構築を図ることとしました。そこで選択したのが、タワーヤーダとウッドライナーの作業システムです。

若手職員を中心としたチームで現場がスタートしましたが、そこは荒波の連続です。伐倒方法・アンカーの取り方・荷掛け方法・主索の張替えの手際等々、様々な面で技術不足が浮き彫りになり、ひとつひとつをクリアするのに必死でした。それでも何とか若さと情熱で波を乗り越えていったのが平成27年度の施業地でした。

その後、平成28年度の施業地では技術習得により作業工程・人員配置を改善でき、27年度比20パーセントを上回る4.8m³/人・日の生産性をあげることができました。しかしながらこの数字は皆伐施業を行う上で最低ラインであり、森林所有者への還元や他団地への提案を推進していく上ではもう一波、二波を乗り越えて、技術力を高めていく必要があると感じています。

植栽・獣害対策

皆伐地への地拵え・植栽作業では、急傾斜地に加え経験の浅い若年職員

が多かった為、当初予定より経費が掛かってしまいました。ここについても技術力の向上が必要と感じます。また、コンテナ苗や植栽密度など、植栽方法の検討も必要です。

獣害対策については5、6年ほど前までは対策の必要性をほとんど感じていなかったのですが、ここ数年シカやカモシカを頻繁に目撃するので、植栽木の約60%を筒状の網で保護しました。残り40%はそのままの状態の様子を見ることにしました。結果、保護をしていない苗木の多くが食害に遭ってしまいました。シカを甘く見過ぎていました。今後、当地区においての造林地には、獣害対策が必須であることが分かりました。

再造林した木の成長が見込めなければ、更新伐は失敗に終わります。シカ・カモシカ対策には従来の対策方法に囚われず、様々な方法を考え、着実に対策をしていく必要があります。もちろん費用対効果を十分に考慮しなくてはなりません。対策には費用がかかりますが、なんとかクリアしていかなければならないところでした。

今後の課題

架線技術の向上、獣害対策等、課題は多くあります。中には森林組合単独での解決は難しく、行政などと連携が必要なものもあります。今後はこれらの課題を解決しながら、主伐から造林までの各工程を効率的に進めることによって更新伐施業のシステムを構築していきたいと思えます。そして、森林所有者への還元と木材の安定供給、次世代への森づくりを確固たるものにしていきたいと思えます。



▲タワーヤーダ+ウッドライナーの組み合わせた集材

県庁 だより ①

ニホンジカによる森林被害への新たな取組 ～ 森林整備者による捕獲 ～

経済産業部森林・林業局森林整備課

ニホンジカの新たな捕獲方法や国庫補助事業の活用例について紹介いただきました。

はじめに

静岡県の森林は、41年生以上の森林が85%を占め、木材として利用可能な時期を迎えています。今後、利用間伐や皆伐を行い、森林資源の循環利用を進めながら人工林を適正に整備していくことが重要です。

しかし、皆伐を進める上で、植栽木が食害を受けることがあり大きな課題となっています。このため、県では、ニホンジカ対策を森林整備のひとつと位置づけ、森林整備事業によるニホンジカの捕獲事業を開始しました。

ニホンジカによる森林被害の現状

平成27年度の本県の動物による森林被害は178haで、そのうちニホンジカによる被害は105haとおよそ6割を占めており、その割合は年々高くなっています。

ニホンジカによる森林被害は、植栽木の食害や剥皮被害などの林業被害のほか、伊豆半島の天城山などでは、ニホンジカによる食害のため下層植生が消失してしまった森林があり、土壌の流出や表層の崩壊が危惧されています。

森林整備事業による被害対策

これまで森林整備事業では、植栽した苗木をニホンジカの食害から守るための防護柵を設置するなどの防護対策を中心に実施してきました。

しかし、ニホンジカは繁殖力が高く、理論上は4～5年で個体数が倍増すると言われています。ニホンジ

カによる被害から森林を守るためには、森林組合等の森林整備に携わる方（以下「森林整備者」という）が、防護だけでなく捕獲も合わせて行うことが重要です。

このため、県では、防護柵の設置への支援に加え、平成28年度から森林整備者によるニホンジカの捕獲を実施しています。これは、国庫補助事業である環境林整備事業を活用し、森林整備者自らが行う、囲いわな等の施設の整備や被害森林におけるわなによる捕獲等に対して支援を行うものです。今年度は、伊豆市と小山町において囲いわなや首くくりわなによるニホンジカの捕獲を実施しました。

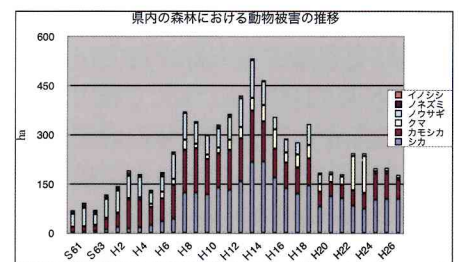
また、県営事業として、ICTを活用した囲いわなによるモデル的な捕獲を富士地域において実施しました。このわなは、監視カメラの映像をスマートフォンで確認しながら、遠隔操作で入り口の扉を落として捕獲することができます。これにより、捕獲効率の向上とわなの見回りの省力化が図れます。

このほか、皆伐地周辺での効率的なニホンジカ対策の参考とするため、浜松市天竜地区を中心にGPS首輪を用いたニホンジカの行動追跡調査を行っています。

これから

平成29年度以降も、森林整備と一体的に行う防護柵等の獣害防止施設の整備への支援を進めるとともに、森林整備者によるニホンジカの捕獲事業を他の地域へ拡大します。

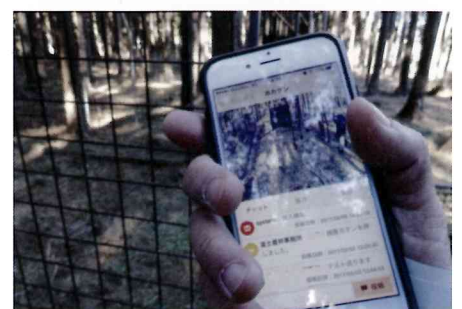
また、森林整備者の皆様に捕獲の技術を身につけていただく機会の提供や新しい捕獲技術の提供を行っていく予定です。



▲ニホンジカによるスギ幼樹の食害



▲囲いわな全景



▲スマートフォンのアプリ画面

県庁だより②

非住宅分野での県産材の利用拡大の取組

静岡県林業振興課県産材利用班

県産材の利用拡大に向け県内企業等と連携した取組や新たな表彰制度について紹介いただきました。

東京五輪を契機とした県産材の販路拡大

東京オリンピック・パラリンピック競技大会の関連施設では、積極的に木材を利用する方針が打ち出されており、これは、これまで利用が進んでこなかった、都市部の商業施設など非住宅分野での木材利用拡大の契機となるものです。

これまで、県では、県産材の供給体制の一層の強化を図るため、一定の品質と安定した供給力を求めるユーザーのニーズにワンストップで対応できるよう、製材工場等のネットワークづくりを県内6地域で支援してきました。



▲木材の調達を担うバイヤーを招聘し、県内企業の商談機会を創出

(平成28年7月・9月)



▲新宿で本県単独の見本市を開催

(平成28年2月)

また、全国に県産材の品質と供給力をPRするため、県内企業と連携して、木材バイヤーの招聘や首都圏展示会への出展などの取組を進めています。

1月19・20日には、東京都主催の展示会「WOODコレクション(モクコレ)2017」に、県木材協同組合連合会と共同でブースを設けて、建築用材や家具、おもちゃなどを展示しました。

全国に向けて本県の強みである森林認証材などの県産材の品質の高さや供給力をアピールしました。



▲「WOODコレクション2017」の本県ブース

県産材利用の社会的評価を高める

今年度は、県産材の利用の模範となる優良建築物を表彰する「ふじのくに木使い建築施設表彰制度」を創設しました。

県内外から、保育施設や庁舎、店舗等、31施設の応募がありました。

有識者等による審査の結果、最優秀賞には、『浜松市天竜区役所・天竜消防署』が選ばれました。

非住宅分野での利用拡大に向けた機運醸成

また、建築主と設計者の県産材利

ふじのくに木使い建築施設表彰

県産材利用の模範となる建築施設を表彰

区分	施設名	場所
最優秀	浜松市天竜区役所・天竜消防署	浜松市天竜区
優秀	浜松信用金庫 於呂支店	浜松市浜北区
	静岡ガス本社ビル	静岡市駿河区
優良	南伊豆認定こども園	南伊豆町
	機漣美フーズ レストラン	愛知県豊橋市
	はとばキッチン	静岡市清水区



表彰式(平成28年10月6日)

用の意欲を高めるため、有識者や建築・木材関係団体及び県で構成する「ふじのくに木使い推進会議」を新設し、11月に会議を開催しました。会議は、東京大学大学院の稲山教授から、流通サイズの一般材を使いコストを抑えた建築施設や、低層中大規模木造施設のメリットについて講演を、お招きしたミニストップや清水銀行などから、木材利用のメリットの紹介をしていただきました。

また、意見交換では、参加者からのコストや構造、メンテナンスなどの疑問に対して、構成員が課題解決に導く助言や情報提供を行いました。



▲「ふじのくに木使い推進会議」

(平成28年11月)

今後の取組

この推進会議では、設計者にとって、一般に流通する木材を活用してコストを抑えた工法などの知識や、県産材製品の特徴や入手先などの情報を共有する機会が十分でないことが改めて浮き彫りとなりました。

このため、設計者が様々な県産材を適材適所で活用する方法を学ぶ研修会の実施や、設計者と木材供給者の情報交換の仕組みづくりを検討しています。

県では、こうした取組を重ねていくことで、住宅分野に加え、非住宅分野での県産材の利用拡大を進めていきます。

県庁だより③

「ふじのくに森林の都 しずおか」でつながろう

静岡県森林計画課 森林計画班

県職員の日々の業務の中で面白そうな話題をセレクトして分かり易い内容で外部に発信している取組を紹介いただきました。

Facebookは、Facebook, Inc.が運営するインターネット上の交流サイトで、ページに対して「いいね！」を押していただいた方（図1参照）にリアルタイムで情報を届けることができるのが特徴です。県の各分野でもそれぞれ公式ページで情報発信をしています。

地域の取組を毎日発信

森林・林業関係では、Facebookページ「ふじのくに森林の都しずおか」を平成27年8月から運用しています。

記事は、静岡伊勢丹とオクシズ材のコラボ企画、市町と森林組合等が加入する森林認証管理団体の設立総会の様子など、森林の都づくりに関する地域の皆さんの取組を県職員が取材し、毎日発信しています。その結果、フォローいただいている方は前年の267人から2倍の542人（原稿作成時点）に増え、総閲覧数は1年間で10万回以上に達するなど、森林に関心の持つ多くの皆さまと「いいね！」でつながっています。

Facebookによる新たな繋がり

Facebookによる情報発信を通じて、これまでの紙媒体による情報発信では実現できなかった、新たな繋がりが生まれました。

静岡県山林協会が主催した林業に関する就職相談会「森林の仕事ガイダンス」の記事は、ブース出展した林業事業体のフォローにより情報が拡散しました。

また、県立森林公園主催の「危険

から自然を学ぶ、毒きのこ観察会」や、オクシズ産しいたけの新商品を発信することで、これまでは関わりの薄かった、きのこに興味関心があ

る方に「いいね！」をいただいています。

ふじのくに「森林の都しずおか」づくりに向けて

「環境」「経済」「文化」が調和した「森林の都しずおか」づくりは、皆さまの日々の取組によって推進されるものであり、今後も地域の取組に対してアンテナを高くし、きめ細やかな情報発信をしていきますので、会員団体の皆さまの「いいね！」による応援をお待ちしています。

表1 平成28年人気記事ベスト5

順位	タイトル	閲覧数	記事へのいいね!
1位	求む、きこり。「森林の仕事ガイダンス」	5,331	478
2位	林災防の講師による模範伐採	2,304	70
3位	危険から自然を学ぶ、毒きのこ観察会	2,100	36
4位	林業職員が見た熊本県は今（災害派遣報告①）	1,749	46
5位	「森林の仕事ガイダンス」を開催しました	1,709	79



Find us on



図1

本部情報

林業への就職希望者の動き (森林の仕事ガイダンス)

当協会は平成10年に林業労働力確保法に基づく「林業労働力確保支援センター」に指定され、林業への就業希望者への情報提供・相談や就業後の技術研修、就労環境の向上等の担い手事業を実施しています。ちなみに本県の林業作業員の半数近くが何らかの形で山林協会の研修等への参加や就労環境事業で支援を受けたことがあります。また、40歳以下の林業作業員の約2割が県外出身者であることから、当協会としても県外での就業者募集活動を行っています。

この2月4日(土)には東京都港区JR有楽町駅前の東京国際フォーラムで、全国森林組合連合会が主催し35都道府県が参加する「森林の仕事ガイダンス」に当協会もブース出展しました。

このガイダンスは、林業へ就業を考えている人たちを対象にした説明・相談会です。毎年1月末前後に全国3都市で開催されます。今年の東京会場の参加者は1108人で昨年より1割増え過去最高でした。

参加者が増えてきたのは、各県市町村の国産材を使った施設や国産材をふんだんに使うオリンピック会場等が様々なメディアに取り上げられることが増え、林業が肯定的に語られ始めたことが背景にあるように思えます。

会場では13時からブースでの面談が開始され、最初の百人くらいの参加者が集団で会場に入ってくる時の表情に昨年よりも明らかに熱いものがあると感じました。

当協会のブースでは協会職員2名と県林業振興課職員1名の3名態勢で面談を行いました。13時なると同時に参加者が訪れ始め、終了時間の5時まで、引きも切らずに参加者が

訪れ相談員は席を外す時間も取れない状態でした。昨年は5時近くになると手が空いた感がありましたが、今回は来訪者が多くかつ熱心で当方の説明にも力が入り、一人当たりの面談時間が長くなりがちでした。本県ブースに寄ったのは50人程度いたと思いますが、途中で順番待ちの方の中にはしびれを切らし他県のブースに移動する方もいました。なるべく多人数と面談する事を心掛けましたのですが、3人態勢で40人の面談が限度で昨年の2割増しでした。

途中で会場全体の様子を見に行きませんでしたでしたが、周りの他県ブースと比べても本県のブースは人気が高かったように思えました。



▲他県と比べて順番待ちが多い静岡県ブース
面談した40人のうち、すぐに又は近い将来林業に就業したい人は18人で、残りは林業就業の情報収集の方です。また全体の7割が他県の出

身者でした。(※表参照)

現在の職業はサービス業、営業、IT関係が多く、平均的に質が高い人材だと思います。ガイダンス参加理由として自然の中での作業や間伐などで自分が働いた成果がすぐに実感できることや、恒常的に残業が続く仕事に従事しているためか、林業では夜間の残業は基本的に無いことなどに興味が高いようでした。半面、給与面では現給与より低いことに引っ掛かるものがあるようです。本県出身の方は地元で就職を希望されますが、他県出身の方にどの地域での就職を希望するか聞くと、首都圏に近く観光等で訪れた経験がある伊豆、東部、富士地域の希望が高い状況でした。

今回のガイダンスをみても、またNPO法人ふるさと暮らし情報センター(東京)発表の2016年移住希望地域ランキングで本県が全国3位となったことから、本県の人気は高いのは確かです。就業促進に向けては首都圏に近い本県の立地や交通の便の良さのPRは必須で、さらに山間地での住宅確保、給与水準の底上げに事業体の努力が必要であると思えます。

表1 静岡県ブースへの来訪者数 単位:人

	出身県別	10代	20代	30代	40代	50代	60代	計	
		男	本県出身	2	5	3	3		
他県出身	1	3	5	12	1	1	23		
女	本県出身		1					1	4
	他県出身		1	2				3	
計		3	10	10	15	1	1		40

(注)本県出身者:本県居住者と本県出身で他県居住者の合計

表2 林業就業に対する考え

考えの区分	人数
すぐにも林業に就職したい	5
近い将来林業に就職したい	13
職業の一つとして林業を考えている	12
情報収集として考えたい	15
計	40

「森と人」
編集・発行 公益社団法人
静岡県山林協会
静岡県葵区追手町9-6 県庁西館9F
TEL:054-255-4488/FAX:054-255-4489

森林・林業関係のイベント等の予定紹介

○「春の森づくり県民大作戦」

平成29年4月1日～6月30日

場所:県内各地で開催予定

問合せ先:静岡県HPで

「森づくり県民大作戦」と検索

○「全国野鳥保護のつどい」

平成29年5月14日(日)11時～12時

場所:熱海市熱海 ホテルニューアカオ

問合せ先:公益財団法人日本鳥類保護連盟

電話:03-5378-5691